

パナマ日本人学校における小中連携を意識した英語教育

前パナマ日本人学校 教諭

北海道河東郡鹿追町立鹿追中学校 教諭 高 嶋 幸 太

キーワード：小中連携、英語教育

1. はじめに

縁あって在外教育施設で教鞭をとる機会をいただいた。これにより、私は全校児童生徒に英語を教えるという貴重な経験をした。その概略を紹介したい。

2. パナマ共和国

パナマ共和国（首都パナマシティー）は北米大陸と南米大陸を結ぶ、北海道よりやや小さい国である。太平洋と大西洋を結ぶ交通の要衝として古くから発達してきた。

人口約387万人、在留邦人は334人（2015年10月現在）いると言われている。公用語はスペイン語だが、英語は大きな病院やホテルでは話せる人がいる。

国のほぼ中央、国土がもっとも細くなった場所に太平洋側とカリブ海側をつなぐおよそ80キロのパナマ運河がある。気候は年中を通して温暖多湿で、5月～12月までの雨季と1月～4月までの乾季がある。



パナマ共和国

3. パナマ日本人学校

平成25年度は在籍児童生徒数が21名、派遣教員数が校長含め5名であった。ここ数年の児童生徒数の減少は顕著で、平成27年度は在籍児童生徒数が17名となった。少人数であるがゆえに、学校の雰囲気はアットホームであり、全校児童生徒が仲良く生活している。

パナマ日本人学校はパナマの国際学校として認可されているため、スペイン語の授業が必須である。児童生徒は週2時間、現地講師からスペイン語を学んでいる。外国語活動の時間に加え英会話の授業を行うなどコミュニケーション能力の育成に努めている。

現地の学校と年4回の交流学习を行っており、けん玉・輪投げ・紙風船といった日本の文化に触れたり、現地校の友達と一緒に算数（数学）の問題を解き、教え合うなど、日本の教育を発信するよい機会にもなっている。

魅力ある学校作りの取り組みとして、基礎学力定着及び難問挑戦等での応用力アップを目的とした放課後学習会が定期的開催され、長期休業中には苦手分野の克服及び自主学習意欲の向上を図ることを目的とした学習相談日を設定している。

4. 小中連携を意識した英語教育研究の概要

パナマ日本人学校では、小学部1年生から中学部まで、英会話を週1時間（小学部5・6年生は英会話の他に外国語活動を週1時間）行っている。英語の歌や英単語絵カード取り等の「聞く」活動及び自己紹介やペアワーク等の「話す」活動を中心とした授業を展開している。これらの授業内容に加え、英語の歌詞を読んだり、カードに書かれた簡単な英語表現を書くことにより、英語に興味をもち、英語で表現できる児童生徒の育成につながると考え、小中連携を意識した英語教育を行ってきた。

5. 研究実践

(1) 英語を使用した授業実践

英会話及び外国語活動の授業では、外国人講師とのチームティーチングを基本とし、オールイングリッシュで行った。

(2) 実践的コミュニケーション能力の育成

現地校との交流では、英語で日本の気候、自然、特産物などをバディ（現地校の友達）に紹介した。また、学習発表会では、パナマの動物紹介について英語で書いたものを暗記し、身振り手振りを用いて英語で表現した。



学習発表会 ～英語でパナマの動物紹介～

6. 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・積極的に英語を使い、自ら話そうとする児童生徒が増えた。
- ・「もっと読みたい」「もっと書きたい」という学習意欲の向上が見られた。

(2) 課題

- ・児童生徒数が少人数であることによる個に応じた指導方法の工夫と改善。
- ・英会話及び外国語活動担当者への引き継ぎ。

7. 研究の結果

パナマ日本人学校での3年間、全校児童生徒に英語を教える機会をいただいた。世界各国から転入してくる児童生徒に、英語を使って会話をすることの楽しさ、日本語にはない発音を覚えることの難しさ、英語を通じて視野が広がっていくことの素晴らしさを伝えることができた。

「買い物に行ったときにお店の人の英語が理解できた」「現地校の友達に自分の英語が通じた」「英語の物語を自分で読むことができた」「自分の思いを英語で書くことができた」という児童生徒の感想から、「聞く」「話す」指導を中心としながら、「読む」「書く」指導も行い、4技能をバランス良く取り入れることにより、英語に興味をもち、英語で表現できる児童生徒の育成が可能になると考える。

8. おわりに

3年間、パナマでの日々を健康かつ大変有意義に過ごすことができた。私に多くの「気づき」を与えてくれた、日本人学校での上司、同僚、保護者、日本人会、そして子どもたちに感謝の気持ちを伝えたい。この貴重な経験を将来を担う北海道の子どもたちに還元していきたい。



小学部3年外国語活動 ～英語でカード取り～